

二つの世紀転換期における文学と社会

Literature and Society in the Ends of the 18th and the 19th Century

総括研究員：植和田光晴

分担研究員：木村英二 中村茂裕 山元哲朗 七尾 誠 福田美智代
石川 實 内村瑠美子（全員教養部）

当研究グループは、標記の総合研究課題について、前年度（1991年度）中間総括に報告した各研究員の当面の研究目標達成のため、既定の方針に従って月例の研究会を開き、各研究成果の発表を継続した。以下にそのレジュメを列挙して本年度の中間報告とする。

木村英二：幻想文学の議論と文学における「幻想的なもの」 トドロフ以降の幻想文学研究が共有しているジャンル論的ペダグティズムを批判し、ジャンルとしての幻想文学は19世紀的ディスクールの落し子であること、それに対して広い意味での「幻想的なもの」は、言語一般の本質である二項対立に発しながらもたえず既成の分節を越えようとする文学のディスクールそのものに根ざしていることを指摘した。(24.11.92)

中村茂裕：18世紀末のドイツ市民社会における女性像 ホフマンの『G町のイエズス会教会』（1816年）における女性像（アンジョラ）を中心に分析をおこなった。主人公の内面を、精神的に分析したジェイムス・M・マクグレイスリーの解釈に代表される従来の解釈の限界と問題点を浮き彫りにするために、フェミニズム的なアプローチを試み、「18世紀末のドイツ市民社会における女性像」という視点から再検討を加えた。

山元哲朗：ヘルダーリンとフランス革命 1954年ロンドンで偶然に発見されたヘルダーリンの詩『平和の祝祭 *Friedensfeier*』の第2節と第9節に現れる *Der Fürst des Festes* は何を指すのか。ナポレオン説、キリスト説、ドイツ民族の守神説（バイスナー）、サテュロス説（ビンダー）等諸説がある。これはこの語がヘルダーリンのフランス革命受容の姿勢の考究のために重要なキーワードの一つであることを示している。

七尾誠：ジェラルド・ド・ネルヴァルの作品分析 19世紀前半のフランスにおける文学および社会的激変を、主としてロマン派作家の作品をとおして跡づけていくことを研究目的とした。これまでは、そのうちの一人であるジェラルド・ド・ネルヴァルの諸作品の分析を通じて、この時代のパリに初めて現れた遊歩者 *flâneur* の像を描き出す作業を行い、この出現の背後にあるさまざまな社会的要因をさぐる一助とした。

福田美智代：「ことわざ」について 人間の長い生活の歴史の、多様で広範な経験の中で生み出されて来た知恵の結晶といえるものが「ことわざ」である。ことわざの魅力は、手軽なわりに意味内容が豊かで奥深く、表現形式も変化に富んでいることである。しかしことわざは、定形句という歴史的・社会的所産としての特殊性を持つがゆえに、使用されるための要件が厳しく適用される。その要件を例をあげながら考察した。

石川實：(1)18世紀ドイツの世紀末 この世紀末を市民精神の危機として捉え、超歴史的普遍妥当な原理が個の原理によって崩され、相対主義、歴史主義が生まれる過程を認識論、美学等において考察した。(2)花田清輝における「近代の超克」 個と集団という問題を戦前の『群論』と戦後の『ミツィ・ゲイナー論』とを比較しながら考察し、そこに見られる一貫性に照明を当て、転向を云々することの誤りを指摘した。

内村瑠美子：同時代人ネルヴァルとハイネ フランス大革命に夢を託したドイツ人詩人ハイネと、そのドイツのロマン主義に深く影響を受けた11歳年下のフランス人詩人ネルヴァルは、ハイネのパリ亡命後、交友関係にあった。激動の19世紀前半のフランスを共に生きた二人の詩人の文学的・私的影響関係を、ネルヴァルのハイネ翻訳・紹介事情を中心に研究し、その中間報告を口頭で行った（93年1月26日）。

植和田光晴：トラークル研究書『ゲオルク・トラークルの時代のザルツブルク』について本書の紹介を兼ねて、テキスト-コンテキスト、文学-社会を一つのパースペクティブの中に捉えるべき、方法論的可能性の検討の必要性に言及した。